HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	コンテンツツーリズム : メディアを横断するコンテンツと越境するファンダム
Author(s)	山村, 髙淑; シートン, フィリップ
Description	本書は北海道大学出版会から2021 年に紙媒体で出版したものを、紙媒体絶版を期に、出版社の許可を得て、北海道大学観光学高等研究センターが電子版としてオープンアクセス化したものです。 本書から引用を行う場合は、書誌情報を以下のようにご記載下さい。 山村高淑, フィリップ・シートン編著・監訳, [2021] 2024, 『コンテンツツーリズムーメディアを横断するコンテンツと越境するファンダム』, 北海道大学観光学高等研究センター.
Issue Date	2024-04-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/91559
Type	book
File Information	02_Acknowledgment.pdf, 個別ファイル：謝辞

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

本書から引用を行う場合は、書誌情報を以下のようにご記載下さい。

山村高淑，フィリップ・シートン 編著・監訳，［2021］2024，『コンテンツツーリズム――メディアを横断するコンテンツと越境するファンダム』，北海道大学観光学高等研究センター.

謝　辞

山村高淑，フィリップ・シートン

本書は，日本学術振興会（JSPS）科研費 JP26243007（基盤研究 A・観光学）の助成を受けた，5 年間の国際共同研究「‘contents tourism’ を通した文化の伝播と受容に関する国際比較研究」（2014–2019，研究代表者：フィリップ・シートン）の成果を取りまとめたものです。同共同研究は JSPS による寛大な財政的支援，ならびに北海道大学および東京外国語大学の事務部による科研費に関する実務的サポートが無ければ成立し得ませんでした。心からの謝意を表します。

本書に収録した論考は，2018 年 6 月 7 日から 10 日にかけて東京外国語大学を会場として，上述の科研費助成研究の一環として開催された国際シンポジウム ‘Transnational Contents Tourism in Europe and Asia’（ヨーロッパとアジアにおける越境するコンテンツツーリズム）にて口頭発表された内容をもとに，各筆者が章として書き下ろしたものです。ご発表いただいた方全ての論考を本書に掲載することは叶いませんでしたが，本書を取りまとめることができたのは，同シンポジウムにご参加いただいた全ての皆様の活発なご議論があったお陰です。とりわけ，同シンポジウムにもご参加下さった，トラベル・アンド・ツーリズム・リサーチ・アソシエーション（TTRA: Travel and Tourism Research Association）会長（2020 年まで）であり，編者らの親愛なる友人でもあるスー・ビートン（Sue Beeton）教授は, 2011 年以来，コンテンツツーリズムに関する共同研究にご参画下さり，常に編者らを温かく支援し励まして下さいました。シンポジウムにご参加いただいた皆様，そしてスー先生に心から感謝申し上げます。

本国際共同研究の実施に当たっては，本当に多くの皆様から，温かいご支援，貴重なご示唆・ご助言を賜りました。とりわけ，ネルソン・グレイバーン先生（Nelson H.H. Graburn，カリフォルニア大学バークレイ校社会文化人類学・名誉教授）からは，長期にわたり温かい学術的ご支援をいただきました。編者の山村はグレイバーン先生のご招待で，2017 年 3 月 10 日から 11 日に同校人類学部で開催された国際シンポジウム ‘Contents Tourism: Creativity, Fandom, Neo-Destinations’ にて，私どもの共同研究について基調講演をさせていただきました。また同シンポジウムでは，ディーン・マキァーネル先生（Dean MacCannell，カリフォルニア大学デイビス校環境デザイン学・名誉教授）が山村の発表に対するコメンテーターとしてご参加下さり，直接，多くの貴重なコメントとご助言をいただきました。一方の編者のシートンは，カール・イアン・チェン・チュア博士（Dr Karl Ian U. Cheng Chua）のご招待で，2018 年 2 月にフィリピンのアテネオ・デ・マニラ大学にて，基調講演をさせていただきました。本書の結論部分で展開した議論の多くは，そこでの講演内容がベースになっています。また，シートンはヘレン・マクナートン博士（Dr Helen Macnaughtan）とロンドン大学東洋アフリカ研究学院から招待を受け，本書に記載した研究内容について 2019 年 3 月に講演（W.G. ビーズリー記念講演，W.G. Beasley Memorial Lecture）をさせていただきました。

こうした貴重な機会の数々は，編者らにとって，本研究プロジェクトを国際的に展開していくうえでの，大きなターニングポイントとなりました。先生方各位に心から感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

また，特に以下の国際学会や大学では，研究発表や学術交流，授業等を通して，研究者の皆さんや学生の皆さんから，多くの有用な示唆をいただきました。ここに記して謝意を表します。トラベル・アンド・ツーリズム・リサーチ・アソシエーション・アジア太平洋支部（TTRA Apac: Travel and Tourism Research Association, Asia Pacific Chapter），英国日本研究協会（BAJS: British Association for Japanese Studies），ヨーロッパ日本研究協会（EAJS: European Association for Japanese Studies），アメリカ人類学会（AAA: American

Anthropological Association），東京外国語大学大学院国際日本学研究院，北海道大学現代日本学プログラム，北海道大学観光学高等研究センター，北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院。

このほか，数多くの方々からお力添えをいただきましたが，紙幅の都合上，全てのお名前を記すことが叶いません。そうした方々に対しましては，各章にて，謝意を記させていただきます。

最後に，本書（*Contents Tourism and Pop Culture Fandom: Transnational Tourist Experiences*）の刊行に際し，その原稿査読から編集，出版まで手厚くサポートして下さった，チャネル・ヴュー・パブリケーションズ（Channel View Publications）の全てのスタッフの皆様に心から謝意を表します。本書の執筆・編集に際し，内容に誤りの無いよう，著者陣ならびに編者は万全の注意を払って参りましたが，万が一，誤りがありました場合，その責任は出版社ではなく，全て著者ならびに編者にあります。